

Title	書評 Jeffrey A. Bell, Deleuze's Hume : Philosophy, Culture and the Scottish Enlightenment
Author(s)	得能, 想平
Citation	哲学論叢 (2011), 38(別冊): S109-S112
Issue Date	2011
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/151114">http://hdl.handle.net/2433/151114</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

---

書評

---

**Jeffrey A. Bell, *Deleuze's Hume : Philosophy, Culture and the Scottish Enlightenment* (Edinburgh University Press, 2009, x+169p.)**

得能想平

---

著者の Jeffrey A. Bell は Southeastern Louisiana University で教鞭をとっており、現象学とポスト構造主義を専門にしている。著書としては他に *Philosophy at the Edge of Chaos: Gilles Deleuze And the Philosophy of Difference* などがある。

本書はドゥルーズ哲学とヒューム哲学の関係を、認識論、歴史、政治についての観点から見るものである。そしてこれらの観点によって、ヒュームからドゥルーズへの影響が前期から後期まで一貫して大きなものであるということを明らかにする。

本書前半、第一章から第三章では認識論的な問題を扱う。著者はヒュームの立場を紹介したのち、ドゥルーズのヒューム論である『経験論と主体性』の概略を示す。ついでドゥルーズのベルクソンへの関心が、ドゥルーズ自身の経験論の延長によるものであること、そしてベルクソンの（さらには、ウィリアム・ジェームズの）ヒューム批判にも関わらず、ドゥルーズは彼らの批判に答えるものをヒュームの中に見つけ出していることが述べられる。

第四章から第五章では、ドゥルーズとヒ

ュームの歴史の見方に関する類似点が述べられる。具体的には、慣習的な文化と創造的な出来事の間を考察する上での、ヒュームの『芸術と学問の生成・発展について』とドゥルーズの『アンチ・オイディプス』の立場が比べられることになる。最終章の第六章では、第五章までで得られたドゥルーズの経験論的立場と政治のかかわりが、生成(devenir)概念の考察を通して述べられる。本稿では、認識論と歴史の観点に内容を絞って、紹介していきたい。

著者はまずドゥルーズのヒューム論『経験論と主体性』の概略を示す。ドゥルーズは、ヒュームの内に見いだした自身の経験論的立場のことを「超越論的経験論」と呼ぶ。この立場が問題にするのは、「人間が所与を超えてどのように主体化するのか」である。ドゥルーズは、知覚から得られる経験知の内容だけでは、人間のふるまいや社会活動を説明できないことに注目する。

すでによく知られているとおり、ヒュームの知覚論は、自然として存在する「秘密の力」が人間に印象を与え、そしてその印象がコピーされ、観念として記憶・想像の中に保存されるということに依っている。ドゥルーズの問いとは、人間の心がこのようにして得た観念の集まりだけを内容として、どのようにして価値判断し、合理性を持ち、文化を作っていく主体になるのかを探究するものである。

ドゥルーズがこの問いに答えるものとしてヒュームの中に見いだすものは、考案

する(invent)、信じる(believe)、という二つの行為である。この二つの行為によってこそ、人間は所与を超えるとされる。

著者は、どのような条件において考案すること、信じるのが可能になるかをドゥルーズに沿って確認していく。ドゥルーズはこの条件を、ヒュームの提示する人間性の原理を用いて考える。ここで人間性の原理とは、推定された人間の能力のことであり、具体的には情念原理と連合原理のことを指す。情念原理とは、ある知覚に対して、快・不快の印象を結び付ける能力であり、連合原理とは、知覚と観念、もしくは観念同士を結び付け、観念に秩序を与える能力のことである。

この二つの原理が観念や知覚といった要素同士を結び合わすことができるのは、習慣によるとされる。ドゥルーズは、観念や知覚そのものに何らかの必然性が存在するのではなく、それを受け取る人間が必然性を与えるという、要素に対して関係が外在するという立場を前提にしている。

ドゥルーズは二つの原理の組み合わせによって、主体化を説明する。ドゥルーズはまず、二つの原理の組み合わせが二種類の別の用途に用いられていると考える。一方で原理は、知覚の一部である感覚の印象に快・不快などの情念を結び付けるために使われる。これは知覚の中の一部を、記憶の中の観念の集まりと結び付けて切り取り（連合原理）、それに対して快・不快の印象を結び付ける（情念原理）ものである。

他方で、印象と同じグループに属する観念全てを呼び起こすことで生じる反省の印象を生み出すためにも、二つの原理が用いられることになる。感覚の印象を反省することにより、観念同士が記憶の中で新たに結び付けられて（連合原理）、結び付けられた観念に対して快・不快の印象が結び付けられる（情念原理）のである。

ここでわかりやすくするために評者が例をあげることにしよう。ある人間Aが机上のマグカップに入ったコーヒーを不注意でこぼしてしまったとする。Aはまず、自分が何をこぼしたのかを認識するために、知覚を観念に結び付け、それがコーヒーであることを知る。そして、その印象に、不快の印象を結び付けることになるだろう。さらにAはこの知覚を反省し、机の端の方にマグカップをおいてしまったことを思い出すかもしれない。これを思い出したAは不快になることをさけるために、マグカップを机の端には置かないようにすることを考える。述べられているのはこのようなことである。

ドゥルーズは、ここで挙げた主体化のプロセスを可能にするためのさらなる条件へと論を進めることになる。つまり、上述の二つの原理の二種類の使用が可能になるためのさらなる前提が必要になるとドゥルーズは述べるのである。それは二つある。一つは、外界存在の同一性、さらに自然の斉一性など、いわゆるケンプ・スミスが述べるような「自然的信念」が想定されねばな

らないということである。これは知覚と観念が結びつく際に、心は、知覚を可能にする秘密の力に対して可能的構造を想定している必要があるということ、つまり対象の同一性が、所与から習慣によって構成され、心の中に保存されていなければならないということである。もう一つは、この可能的構造から、われわれの意識にのぼる知覚が選出されるためには、情念が不可欠だということである。情念によって、心が現実の関心に従属することで、可能的な構造から知覚が切り取られ、さらにその知覚に対して、反省の印象としての考案することと信じることの両方が、われわれの心に与えられるとされる。よって、「理性は情念の奴隷であり、そうあるべきである」というヒュームの有名なテーゼは、情念こそが人間の能力のすべてをまとめるものである、というようにドゥルーズによって独自に解釈されることになる。

著者は、以上のように超越論的経験論をまとめるのであるが、とりわけ対象の同定のために必要となる可能的構造の信念(belief)に焦点を当てる。ベルクソンやジェームズは、印象や観念といった抽象的な概念から論を始める点でヒュームを批判し、「持続」や「純粹経験」の段階から論を始めることを主張したのであった。可能的構造の構成をみるドゥルーズの立場は、ベルクソンやジェームズの批判をかわし、彼らと同じ段階からヒュームが思考していると主張を可能にすると、著者は述べるの

である。

さらにこの可能的構造の信念が『経験論と主体性』より後のドゥルーズの哲学にとって大きな意味を持つことも指摘される。この概念は、「潜在性」として、『差異と反復』、『意味の論理学』といった著作の議論にも引き継がれており、さらにはそれ以降の時期には「存立平面」と名を変えて、別の角度からとらえられている。このことからドゥルーズ哲学におけるヒュームの影響の大きさを窺い知ることができると著者は述べる。

後半では歴史の問題が取り上げられる。著者は、歴史に関するヒュームの著作である『イングランド史』を、印刷所から死産したとされる『人間本性論』の反省が活かされた著作と考える。この論拠として、『道徳政治論集』における商売人と哲学者、そして歴史学者を比較する次のようなヒュームの意見を参照する。商売人とは、自身の生活の中に入り込み、情念の暴力に振り回されながら人間を考える人々である。その一方で、哲学者は小部屋の中で、情念に振り回されることなしに抽象的なものの見方によって人間を明らかにする人々である。そして、商売人と哲学者の間をとる人こそが歴史学者であるとする。このことから、ヒュームは自身が若書きであったと認める人性論の哲学者による「晦渋な思考」(abstruse thought)に生を込めようとして、歴史についての叙述に打ち込んでいったと著者は見ることになる。

このような目論見の下で、ヒュームの『イングランド史』は、当時のトーリー党とホイッグ党の政治的な争いに対して、中立な立場で歴史を描くことで介入しようと考えていた。この二つの党の本質を歴史的に叙述することで、この派閥争いの有害な影響をなくそうとしていたのである。別の場所でヒュームは、両方の立場の批判も行っている。トーリー党は王を擁護し、ホイッグ党は人々の自由を重視した。ヒュームは、王も一般民衆も政治的経験が足りていないという判断を下し、彼らの行動を規定している本質は、社会的慣習であると唱えるのである。

ヒュームは、この社会的慣習の伝搬と、それを変える才能の持ち主の影響への問いへと向かっていく。この問いに答えるのが『芸術と学問の生成・発展について』というヒュームの論文である。この論文の中では、芸術や学問も社会的慣習によって伝わると述べられている。そして、社会的慣習は、模倣、競争、商売により伝搬し、そして人々はこれらによってこそ、「市民」となるとされる。著者は第五章でこのような見方がスコットランド啓蒙主義の人々の間で共通であったことも指摘している。

ヒュームはこの社会的慣習を変える天才よりも、既存の社会的慣習の方が人々に与える影響が大きいと述べる。天才は、ある程度社会を変えることができるがある程度で留まってしまう。彼の影響が、社会の間に広がるためには次の世代を待たねばなら

ないとする。

さて、この『芸術と学問の生成・発展について』に見られるヒュームの歴史観こそ、ドゥルーズと共通のものである、と著者は述べる。人々の行動が「市民」になることに依っているという点、このこととドゥルーズの領土化の概念が重なり、さらにその「市民」を作る社会的慣習を疑う「晦渋な思考」の方法、これを脱領土化の概念に重ね合わせるのである。さらに、天才はこの脱領土化され、疑いの下に置かれた社会的慣習をもう一度自分の言葉で表現しなければならない。このことは、再領土化として捉えることができると著者は考える。

よって著者は、ドゥルーズにおけるヒュームの影響を大きく評価する。それは、潜在性、存立平面といったドゥルーズの認識論への影響だけではなく、『アンチ・オイディプス』における個体と社会の関係を問う際の方法にも大きな影響を与えているとされるのである。

著者はこの本を通して、様々な具体例、とりわけジャズピアノのインプロビゼーションを学んでいく過程を描くデイヴィッド・サドナウの『鍵盤を駆ける手』を引きながら、わかりやすく論述を進めている。その一方で、とりわけ歴史の観点において両者の類似性を指摘する際、情動(affection)や、表現と内容の二項対立といったドゥルーズの歴史の見方を可能にしている本質的な概念についての言及が少なく物足りないところもあった。